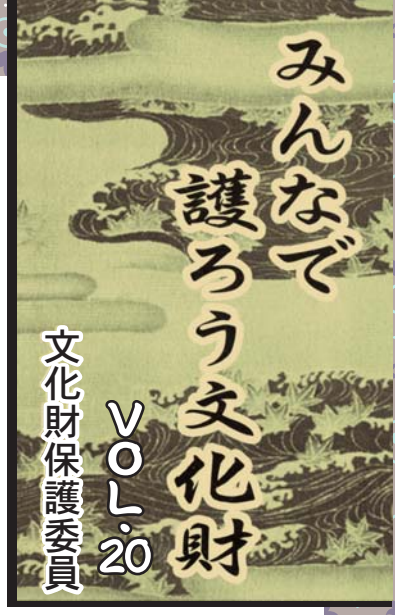


西巌殿寺と文化財

委員長　渡邉　照義

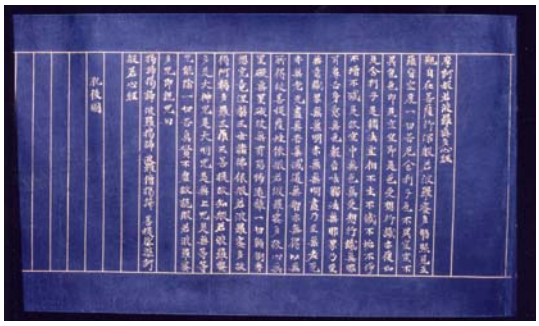
紙本墨書仏舎利渡状（国指定重要文化財（書跡））

今から約650年前の南北朝時代では、北朝と南朝が攻防を繰り返していましたが、次第に北朝に有利な状況になっていきました。そこで、南朝の後醍醐天皇は、各地に皇子を派遣することで味方の勢力を築こうと考えました。九州には懐良親王を征西将軍に任命し、隈府（菊池市）に拠点の征西府を開き、勢力を広げていきました。しかしその後、北朝方の勢力が増してくると、征西将軍の地位は良成親王に譲り、福岡の八女に隠退したとされています。

この書状は、親王が天授元年（1375）11月2日に五条良遠を使者として、西巌殿寺に仏舎利（仏の遺骨など）を奉納したときの渡状です。奉納することで、南朝勢力の回復を祈願したものと思われます。

紙本墨書仏舎利渡状

附従三位惟豊添状



紺紙金泥般若心経

この仏舎利は、正平14年（1359）9月8日に皇室と縁の深い京都の泉湧寺の老住職から贈られたもので、そのときのことも渡状に一緒に書き写されています。懐良親王の動静の一端がうかがえる貴重な史料といえます。

紺紙金泥般若心経後奈良院宸翰（国指定重要文化財（書跡））

今から約450年前の戦国時代、後奈良天皇の在位の時代は争乱のさなかにあって、中央では室町幕府の権威は衰え、皇室の経済的困窮ははなはだしいものでした。更に、天文8年（1539）の大雨洪水による凶作や、同9年には大疫病も発生し、国民は疲弊していました。天皇はこれらを深く憂い、紺色の紙に金字で般若心経を書写して諸国の一宮に奉納し、国家の安泰と国民の幸せを祈られました。このとき奉納されたもので現存するのは9巻しかなく、この書はその中の1巻で大変貴重なものです。

肥後国（熊本県）では、一宮である阿蘇神社に奉納されました。そして、天文14年（1545）に大宮司が西巌殿寺に納めています。このことは、惟豊の書状（添状）に記されてあり、西巌殿寺には般若心経とセットで現在も大切に保管されています。

般若心経は、仏教の教えの真理の智慧（般若）を1巻に凝縮し、簡潔に説いたもので広く読経されていました。